

第5回国際日本学コンソーシアム―「日本」とはなにか

趣旨説明と総括

古瀬 奈津子*

本学では1999年に大学院博士課程に国際日本学専攻が設置され、国際日本学シンポジウムが毎年行われるようになり、その活動の結果、2004年には本センターが設置された。その後、国際日本学が中心となって、2005年度から2009年度には魅力ある大学院教育イニシアティブと大学院教育改革支援プログラムに採択され、国際日本学コンソーシアムを4回にわたり開催してきた。

国際日本学コンソーシアムには、ロンドン大学SOAS（英国）、国立台湾大学（台湾）、カレル大学（チェコ）、淑明女子大学校（韓国）、同徳女子大学校（韓国）、北京外国語大学北京日本学研究センター（中国）、パデュー大学（アメリカ）、パリ・ディドロ（第七）大学（フランス）、本学の9大学が参加しており、毎年12月に本学でコンソーシアムを開催している。本コンソーシアムの特徴は、単なるシンポジウムではなく、複数の共同ゼミによって構成される大学院教育のための組織である点にある。第3回からは、日本語学・日本語教育学、日本文学、歴史学、日本思想の4つの部会に分かれて活動してきた。

しかし、本コンソーシアムは大学院教育を目的としながらも、大学院生だけではなく、教員もともに発表し議論することによって、研究面においても日本学の学問的レベルを向上させることに寄与してきたと考えている。

今回の「『日本』とはなにか」というテーマは、この5年間のコンソーシアムで行われてきた研究

を総括する意味を込めて設定した。

そもそも、「『日本』とはなにか」という問題設定は、「日本論」の議論において、しばしば行われてきたものであると言える。たとえば、日本史に社会史という視点を持ち込んだ著名な中世史研究者である網野善彦氏は、日本の歴史シリーズの第1巻を『『日本』とは何か』というタイトルで刊行している（講談社、日本の歴史00、2000年）。その本の中で、氏は一国史観・均質な日本・進歩史観からの脱却を提唱している。また、日本においては、東国と西国では文化的な背景が異なることを述べている。

日本思想史においては、今年度のベストセラーの一冊である渡辺浩氏『日本政治思想史 十七～十九世紀』（東京大学出版会、2010年）の第十五章は「『日本』とは何か―構造と変化」というタイトルになっている。その中で、氏は前近代においては、カラと向き合う「日本」が相対化されて、小国意識、周辺国家という意識が醸成され、一方では「東」は特別という考えも生まれ、日本を尚武の国であり、質・直とする文明の中心に対してナイーヴな見方や神国、海国とする捉え方も生じたと述べている。

このように、各分野によって、「『日本』とはなにか」という問題設定に対して視角が異なることから、今回は、1日目に日本文化部会（歴史、日本思想）、2日目に日本語学・日本語教育学部会、日本文学部会を設け、最後に全体会を行ってまとめの議論をすることにした。

「『日本』とはなにか」というテーマに沿った報

*お茶の水女子大学大学院教授

告は主に参加者のうち教員の方たちをお願いした。第1日目の日本文化部会では、ジョン・ブリーン氏（ロンドン大学SOAS）「『神都』としての近代伊勢」、ダヴィッド・ラブス氏（カレル大学）「政治、倫理と学問の関連性―幕末、明治初期を中心として」、徐興慶氏（国立台湾大学）「日中文化交流の伝播と影響：徳川初期の独立禅師を中心に」、高島元洋氏（本学）「日本儒教の多様性」の報告があった。第2日目の日本語学・日本語教育学部会では、李徳奉氏（同徳女子大学校）「和・思いやり・ホスピタリティーの日本語教育」、中島晶子氏（パリ・ディドロ大学）「変わる日本語・新しい日本語」、朴海煥氏（淑明女子大学校）「韓国の日本語学研究的今後の方向性」、日本文学部会では、張龍妹氏（北京外国語大学）「紫上の継母物語をめぐる」という報告がなされた。

全体会においては、同時進行の部会もあったため、まず、各部会に参加した大学院生が各部会報告を行った。続いて、各部会の担当者である教員や海外から参加した方たちからの発言があった。

日本語学・日本語教育学部会における李徳奉氏（同徳女子大学校）の報告「和・思いやり・ホスピタリティーの日本語教育」では、日本の言語文化の特徴を韓国の言語文化と比較して、「和」、「他者志向型」と捉えている。日本文化部会の高島元洋氏（本学）「日本儒教の多様性」においては、日本儒教が中国儒教とは異なる形で世界観を発展させた多様性について述べられた。ただし、日本文化の多様性については前述の網野善彦氏も主張されている点ではあるが、たとえば現代アメリカの文化にみえる多様性とはそのあり方が異なるのではないかという意見が全体会に出席された宮尾正樹氏（本学・中国文学）から出された。以上のような議論からわかるように、「日本」の特徴を把握するには「比較」という方法が有効であることが指摘できる。

また、日本文学部会で「紫上の継母物語をめぐる」を報告された張龍妹氏（北京外国語大学）

は、『源氏物語』を古典とし、現代でも女子大学が存在する日本文化の女性性について発言された。

以上で議論された「日本」の文化や社会の特質は初めから存在していたのだろうか。この点については、日本文化部会で報告されたジョン・ブリーン氏（ロンドン大学SOAS）「『神都』としての近代伊勢」が示唆的である。天照大神を祀った伊勢神宮は古代に成立し、記紀神話を通じて古代国家のイデオロギー発祥の地として崇められていた。しかし、中世・近世となるに従い、民衆にも開かれて伊勢参りが行われ観光地化していった。それが、明治時代になると天皇制は近代国家のイデオロギーとして新たに生まれ変わり、伊勢も神都として装置化されたのである。

このように、「日本」の特質とみえるもの、実は近代国家の成立にともない古くからあるものが新しい装いの下、別な意味をもって提示される場合があることに気をつけたい。日本語学部会の高崎みどり氏（本学）も日本語の構造の特質とその変化について発言された。

また、日本文学部会の菅聡子氏（本学）は今年の大河ドラマで言えば、「日本」を表象するのは坂本龍馬であり、大久保利通や木戸孝允ではない、と喩えて言われたように、「日本」のイメージの大衆化の問題もある。

「日本」のもつ特質は歴史的に形成されてきたものであり、常に変わらないというものではない。しかし一方で、「日本」の特質には独自性があるのであり、世界に通用する普遍性をも備えていると考えられる。取り留めのない総括になってしまったが、「『日本』とはなにか」という問題については今後も国際日本学分野において検討していきたい。